白銀の筆

森野　水琴

彼は森の西にある図書館に泊まり込みで来ている。宿泊施設と図書館は連絡通路を利用して悪天候でも行き来できる。
森の一部はハイキングや森林浴を楽しむために利用者に開放されている。
昨夜からの雪が少し積もって一面の銀世界だが歩くことはできそうだ。
慣れた足取りで彼は歩く。雪の日に行きつけの場所があるのだ。
宿泊者は彼だけなので見つかることはあるまい。
三十分ほど歩いて目的地に着いた。

雪が便箋になる
彼は思うがままに　雪を指でなぞり　彼女への恋文を　したためていく
読まれることは無い文だが　なおさらに熱い想いが　ほとばしる

書くだけ書いて満足したように彼は宿泊施設に戻った。

翌朝目覚めると雪が降っている。
朝食を済ませ、彼は昨日の場所に行った。

降り続けた雪で　彼の恋文は覆われてしまっている
砂浜に書いたラブレターが　波にのまれてしまったようなものだ

ふとんを掛けるように　雪が降る
しんしんと　ただ　しんしんと